

# 皆野・長瀬ロータリークラブ

週報

◇例会日 第1・第2木曜日 12:30~13:30 第3・第4木曜日のいずれか 18:30~19:30  
◇例会場 長瀬レクリエーションホテル 養浩亭  
◇事務所 〒369-1305 秩父郡長瀬町長瀬1446 養浩亭内  
Tel:0494-66-4134 / Fax:0494-66-4134 e-mail:minanaga@chichibu.ne.jp



## IMAGINE ROTARY

イマジン  
ロータリー

### 第1591回例会 令和4年8月25日(火)

#### 【会長の時間】

畷 徳治

皆さん、こんばんは。夜間例会の時は、私の趣味の謡曲に絡んでの話を致します。趣味の話だけではなく、ロータリー的な考えも含んでいるという観点で選んで紹介させていただきます。



今回は能の歴史、650年の長きに繋がっていると。日本の老舗企業と比較したような話をしましたが、その続きになります。今回は初心という事でした。今日は私自身も読んで、そういう考えもあるのかと考えが変わったのですが、趣味の世界で家元制度があります。閉鎖的だと思っていたのですが、家元の制度には意味があるんだという観点の意見です。安田登さんの書いた本からの抜粋です。タイトルの「必ず継いでいく」という意思です。

「世阿弥は、後世に能をつなぐために、「必ず継ぐ」という意志を、個人の責任に帰すのではなく、システムとして能の中に取り入れることにしました。名人でなくても、誰しもある程度のレベルを維持でき、次世代に能をつないでいける。それを「伝統」としたのです。」

「家で継いで行く家元制度も、その大きな手段のひとつです。観阿弥は自分の子である世阿弥に観世座を継がせました。世阿弥も実子がいないときには養子を取り、実子が生まれてからは我が子、元雅に譲ろうとしました。ところが観阿弥以前には、芸能の世界ではこのような家による継承形態はほとんどないそうです。となると家元制度は観阿弥が創始した、その後世阿弥が子に継がせたことで確立したといってもいいでしょう。その流れを汲むのが、今の観世流です。」

「西洋的な能力主義を信奉する人からは、家元制度は批判の対象にもなっています。しかし、世阿弥が残した「絶対に能をつないでいく」ということを至上命題にした場合、子どもが家を継承する家元制度ほど確固たるものはありません。実力のある人が棟梁になるという能力主義は、ともすれば跡目争いが起こり、それによって組織が疲弊してしまうことがよくあります。また、たとえば大きな戦争が起こり、ふさわしい人がいなくなった場合には組織自体が消滅しかねません。」

「どんな戦乱があっても、社会が変わっても、

能を継いでいく。この決意のもとでは家元制度が最適な制度であり、だからこそ今まで続けてきたともいえます。しかも、能の宗家継承は実子相続にはこだわらず、養子を迎える場合もよくあります。世阿弥は「家、家にあらず。継ぐをもて家とす」と言っています。実子とか、血縁とか、そういうこと以前に、まずは「継ぐ」ことを最優先する。それを大切にしたからこそ現在の能があるのです。これが万能だとは言いませんが、今の企業経営にもヒントになることではないでしょうか。」

見方によっては、閉鎖的だと考えられる家元制度にもメリットがあるし、長く続けてきた要員だろうと言っています。

今日は幹事が欠席になりますので、幹事報告もさせていただきます。

1. 地区事務所より
  - ①ポリオデーの案内
  - ②深谷の画家合田芳弘氏TV放送について
  - ③留学説明会開催の案内
2. 米山梅吉記念館より
  - ①秋季例祭および賛助会員募集のお知らせ
  - ②館報

以上がきています。

## ニコニコボックス

♪ 皆さん、お久しぶりです。なかなか例会に参加出来ずに申しわけありません。

萩原 繁

合計 1,000 円

## 出席率 100%

「謡曲「熊野」P-3 表

シテサシ 「草木(そうもく)は雨露(うろ)の恩(めぐみ)。養ひ得ては花の父母たり。況(いわ)んや人間に於てをや。あら御心もとなや何とか御入り候ふらん

ツレ詞 「池田の宿より朝顔が参りて候

シテ詞 「なに朝顔と申すかあら珍らしや。さて御所労は何と御入りあるぞ

ツレ 「以ての外に御入り候。これに御文の候御覧候へ

シテ 「あら嬉しやまづまづ御文を見うずるにて候。あら笑止(しょうし)や。此御文の様も頼少なう見えて候

ツレ 「さように御入り候

シテ 「このうへは朝顔をも連れて参り。また此文をも御目にかけて。御暇を申さうずるにてあるぞ此方へ来り候へ。誰かわたり候

ワキツレ 「誰にて御座候ぞ。や。熊野の御参りにて候

シテ 「妾(わらわ)が参りたるよし御申候へ

ワキツレ 「心得申候

ワキツレ 「いかに申上候。熊野の御参りにて候ワキ「此方へ来れと申候へ

ワキツレ 「畏つて候。此方へ御参り候へシテ「いかに申し上げ候。老母の所労以ての外に候とて。此度は朝顔に文を上(のぼ)せて候。便(びん)無(の)う候へどもそと見参(げざん)に入れ候ふべし

ワキ 「なにと古里よりの文と候ふや。見るまでもなしそれにて高らかに読み候へ」

